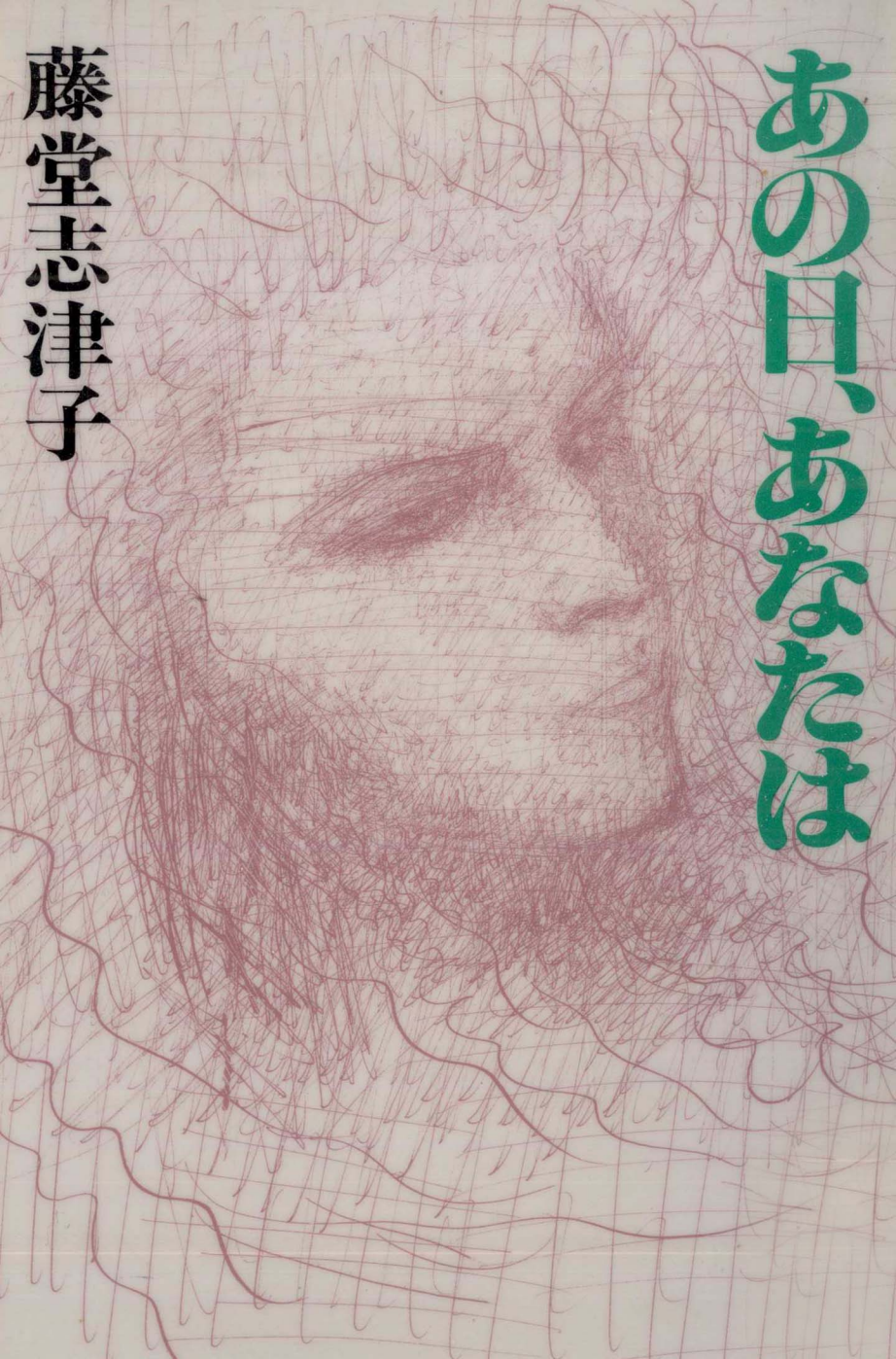
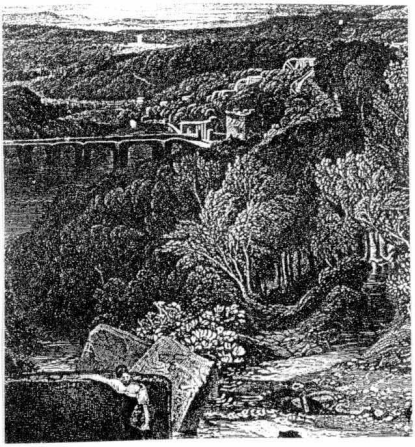
あの日、あなたは

藤堂志津子



あの日、あなたは



藤堂志津子

講談社

藤堂志津子（とうどうしずこ）

昭和24年札幌市に生まれる。本名熊谷政江。藤女子短期大学卒。19歳の時、詩集『砂の憧憬』を刊行。その後、詩作のほか小説を数篇発表。「マドンナのごとく」によって、昭和62年度北海道新聞文学賞を受賞する。昭和63年末、広告代理店パブリックセンター退社。札幌市在住。『熟れてゆく夏』により、第100回直木賞受賞。

著書に『マドンナのごとく』（講談社刊）、『熟れゆく夏』（文芸春秋社刊）『恋人よ』（同）がある。

あの日、あなたは

1989年3月14日　第1刷発行
1989年11月10日　第4刷発行

著　者　藤堂志津子
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二〇一
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　一〇三〇円（本体一〇〇〇円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。
© Shizuko Tōdō 1989 Printed in Japan

ISBN4-06-204340-8　（文1）

書下ろし長篇小説

あの日、あなたは

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

I

新しい自宅兼仕事場に移ってから、半月が過ぎようとしていた。

マンションの3LDKのその部屋を紹介してくれたのは、学生時代からの友人である沢山勇介だった。

私が借りた部屋は、勇介の伯父の宗方夫妻のもので、アメリカに五年間の予定で赴任することになり、期間決めとはいえ、破格の安さで借り受けた。

宗方夫妻には子供がなく、甥の勇介によせる愛情の恩恵の余波に、私もあずからせてもらった。

新しい住まいは地下鉄の駅のすぐそばにあり、フリーの編集者の私には、申し分のない便利さといえた。札幌郊外の実家から通ってきているアシスタントの広美(ひろみ)は、私以上に喜んだ。これまではバスと地下鉄を乗り継いでの通勤だったが、これからは地下鉄一本で通

うことができる。冬の雪道のバスの渋滞には辟易していた、と言う。
広美は一年前までは、勇介の職場の部下だった。編集者という仕事に就くのが夢だ、と彼女から聞かされた勇介が、私の所に広美を連れてきた。
勇介からの頼まれ事でもなかったら、私は広美をアシスタントにはしなかっただろう。そして今回の引越しも、勇介が一人暮しをしているマンションから、歩いて五分の近さだったからこそ、気持を固めた。
私は三十一歳だった。勇介に対して友達の域を越えて接近できる、これが最後のチャンスかもしれないと、ひそかに考えた。
引越しから半月たった五月半ばのその日は、朝から雨が降りつづき、夜になってもやまなかった。
宮川協子に依頼しているPR誌のエッセイの原稿は、夜七時、街中の喫茶店で受け取る約束になっていた。
協子は私立大学の英文学の講師であり、私達が学生の頃に熱中した『嵐が丘』などの「ブロンテきょうだい」を、そのまま自分の研究課題、更にライフ・ワークにしている。
協子も私も、時間には几帳面なほうだった。約束の七時よりすこし早目にその喫茶店へ行くと、すでに協子はきていた。

手渡された原稿にざっと目を通し、二ヵ所説明不足の部分に、その場で書き込みをしてもらうと、私達の仕事は終った。

二杯目のコーヒーを注文し、それを飲みながら、私は新しい住まいに移ったいきさつを協子に語り始めた。引越しの件は前に伝えてはあったが、勇介が絡んでいることは、なんとなく言いそびれていた。大学の三年間、勇介は協子の恋人だった。

私の話を聞いた協子は、これといって際立った反応も示さず、気怠そうに窓の外に視線を向けた。

「勇介のマンションの近くなの……。でもね、郁子、勇介は多分、本質的に昔と変わっていないと思うから、一つだけ忠告しておくわ。彼って、犬みたいな男。それも、お人好しだけが取り柄の、ほら、人間と見れば見境いなしに尾っぽを振って、嬉しそうに近づいてくる犬っているでしょ、あのタイプ。勇介に、あまりまとわりつかれないように注意したほうがいいわ」

私は黙ってコーヒーを飲む。勇介が私の身辺にひんぱんと出没する、そのことこそ、私が願っていることだった。

この半月間、勇介は会社の帰り、広美がまだ事務所にいる時間に、ほとんど毎日のように立ち寄ってゆく。「ただいま」と言って現われ、ネクタイをゆるめながらソファにもた

れかかり、広美が差し出す緑茶をすすりながら無駄話をし、一息ついたところで、改めて自分の住むマンションに帰ってゆく。

協子は窓の外を眺めつづけていた。その横顔は、いつになく疲れがにじんで見えた。真紅の口紅を塗った唇が、所々ささくれ立っている。白い絹のシャツ・ブラウスを、わざとボタンをはずして着くずし、ベージュのタイト・スカートに、同色のトレンチ・コートをはおった協子は、どう見ても大学講師の雰囲気ではなかった。背中の中ほどまで伸ばし、ウェイブをかけた長い豊かな髪は、つねに彼女の装いの大きなアクセントになっている。

やがて協子は、私に横顔を見せたまま、うんざりしたように吐き捨てた。

「田沢には、本当に、まいってるわ」

田沢とは、協子がこの二年ほどつき合っている歯科の開業医だった。

「四十五にもなって、女から別れ話を持ち出されたからって、何も泣くことはないと思わない？　私と別れても、彼にはちゃんと奥さんがいるのよ。あの涙を見て、私、ほとほと愛想がつきたわ。男なんて、人前で泣くものじゃないわよ。みっともないったらないわ」

私は思わず強く言い返していた。

「協子、それは偏見よ。男だって悲しいときは泣く。それで男としての価値が下がるものでもないわ。田沢さんは、きっと本気で協子を愛したのだと思う……」

「そういう思い込みがイヤなの、うっとうしいのよ。男女関係なんて一、二年もたてば飽きるもの」
「あなたの場合はね」
「そう」
私は、一度だけ会ったことのある田沢の、気弱そうな風貌を思い浮かべた。協子は、自分の恋人になった男を、その関係が始まってほどなく、必ず私に引き合わせる。そして、翌日、感想を電話で訊いてくる。私は協子が望んでいる返答通りの内容を口にする。相手の男の美点を拡大して告げる。ただ、その美点は、見方をわずかにずらすと、すぐに欠点にもなり、その意味では、田沢は、協子の相手としてはデリケートで物静かすぎた。
「私も反省はしているの。田沢は、本来は私の好みのタイプじゃなかったから。でも、ずっとダイナミックでパワフルな男達とばかり関わってきて、ふっと口直しがしたくなったのよね。田沢は、どちらかと言うと、勇介タイプの男」
私はからかいまじりに呟く。
「つまり、パトリック・ブランウェル・ブロンテのタイプ」
「現実のブランウェルには、もう手出しをしないつもりだったのよ」
学生時代、協子と私が熱中した「ブロンテきょうだい」は三人の姉妹と一人の男のきょ

うだい。『ジェーン・エア』を書いたシャーロット・ブロンテ、『嵐が丘』を書いたエミリ・ブロンテ、末っ子のアン。シャーロットとエミリとの間に、ブランウェルという男の子がいて、この四人を「ブロンテきょうだい」と呼ぶ。

他の学生の中にも『嵐が丘』や『ジェーン・エア』のファンは少なくなかった。しかし、協子と私の関心は、個別の作品ではなく、「ブロンテきょうだい」、特に幼い頃にその神童ぶりを発揮し、姉や妹の精神形成に大きな影響を与えながら、成人してからは生活破綻者のようになり、三十一歳で死んでしまうブランウェルの存在に強く惹かれた。

私達は、ブランウェルについて、よく他愛ない議論をたたかわせた。役割りは自然と決まっていた。なんの根拠もない思いつきを口走るのは私、その思いつきを、どうにかして立証できないかと、裏付け資料や文献を収集してゆくのは協子。

多分、現在の私と協子の姿しか知らない人には意外に感じるだろう。

協子の男関係も含めた派手な生活振りのかげには、そうした根気強い、地道な面がある。同じように、私のありふれた、平凡な日々の裏には、衝動的で、投げやりな性格が潜んでいる。

協子は大学一年の当時から、すでに大学院に進学し研究者の道を歩むつもりで、授業にもきちんと出席する模範的な学生だった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

協子が勇介に近づいていったのは、ブランウェルのイメージに似ていると、ある日突然言い出したことに端を発していた。私は異議を唱えた。生活不適応者であり、おそらく短い一生を夢想の中で生きつづけたに違いないブランウェルと勇介の、一体、どこが似ているのか。私から見れば、勇介は、男子学生の中でも、まっとうすぎるほどまっとうな男だった。

十余年後の現在、協子は、勇介の一般受けするハンサム振りを「観光用絵葉書きみたいな男」と、多少の軽蔑をまじえて称するけれど、私にとっては一滴の毒も含まない、その万人向きの口当りの良さこそ、かけがえのない魅力として心をなごませる。

勇介は、学生の頃から少しも変わらない。彼は、二十歳前後の、青々とした自意識とぎこちなく格闘している学生達の中にあって、素頓狂なほど晴朗だった。ほとんどのハンサムボーイ達が、ナルシシズムのオブラートの向こうで端正さを演じているとき、勇介は、破れたスニーカーで大学の廊下を走りまわっては、道路工事のアルバイトの補充員を大声でつのり、あるいは、やむをえない事情で自宅から連れてきたペット犬が構内でゆくえ不明になったとかで、その犬の名前を喚き散らしつづけている。また別の日は、ハンバーガーを口いっぱいに頬張って、喉を詰まらせたりしていた。

勇介を恋人にしてから三年後、卒業を目前に控えて、協子は彼を捨てた。

『勇介の、あの明るさのうしろには、もっと屈折したものがあるのかと錯覚していたのだけど、とんでもない。あの明るさは、見事なくらい無色透明よ。限りなくアホに近いわ』

そのとき、協子は齢上の男性と関わり始めていた。何かというと、詩や小説の一節を引用したがる無職の男だった。定職に就くことをみずから拒否し、それが彼の美学だという。その相手と協子は二年近くつき合い、終りの頃になると、彼女は精神的におかしくなり出した。悲惨なほどに痩せもした。それはよほど辛い経験だったらしく、それからの協子は、『どこに出しても恥ずかしくない肩書きを持つ男』にしか興味を持たなくなった。相手が既婚者か否かは、まったく考慮しない。

これまでに協子が親しくなった男性は、医者、弁護士、実業家、大手企業の部長達という、あるクラス以上に限られている。

『私はメジャーな男、力のある男、完成された男以外は不要なの。そういう男達に共通しているのは自信と余裕ね』

他の女性なら、なんという生意気な、と反駁を買いそうな言葉だったが、しかし、協子は実際に望み通りのレベルの男達を、いとも簡単に手に入れてきた。彼女の美貌と均整のとれた身体つき、そのあでやかな外見からは想像もつかない英文学講師という職業は、意外な組み合せとして男達の好奇心を刺激しつづけるらしい。

協子には華やかな男関係はつきものではあったが、彼女は関わった男達から贅をつくされ、ちやほやされることだけに満足してはいなかった。
『私は野心家よ』と協子は、大学院生の頃から平然と言い放った。
『メジャーでリッチになりたいの。金力をベースにして、有名になる、これは一つの権力よ。なぜ権力が欲しいか。生きやすくなるから。この世の中で、自分が生きやすいように生きる、生きられるということは大変な贅沢。でも、私はそうしたいわ。そのためにも力のある男との関わりは大切なの』
窓の外をぼんやりと眺めていた協子が、不意に快活さを取り戻した。
「ね、これから飲みに行きましょうよ。郁子の引越し祝いも兼ねて。ただし、女二人というのはつまらないから、お互いのボーイ・フレンドを呼び出して、四人でわいわいやりましょう」
言いながら、協子はハンドバッグから小銭入れを抜き取り、椅子から立ち上る。私は戸惑いながら協子を見上げた。
「電話一本で呼び出せるボーイ・フレンドなんて、私にはいないわ」
「何言ってるの。衛生無害で、使いまわしの利く勇介がいるじゃない。いいわ、勇介に、私、電話をかけてみる」

一時間後に四人の顔ぶれは揃った。
協子が指定したスナック『ティンカベル』にまず私達が行き、次に勇介、ほどなく中峰達二という五十代半ばの男性が現われた。
中峰は精悍さと品の良さを兼ね備えた、いかにも協子好みの相手だった。スポーツに堪能な実業家といった印象を受けたが、差し出された名刺には、社名の横に予想通り「代表取締役」の肩書きがついていた。
名刺が交換されたあとは、それぞれの職業が話題となって、すぐに打ち解けた雰囲気に包まれた。
中峰が年齢にふさわしい鷹揚さを眼尻の笑いじわに刻ませながら、勇介に話しかける。
「ほう、その若さで取締役部長さんとは、これは凄いですね。薬品会社ですか」
「いえ、実力の伴わない、肩書きだけの役職です。祖父の築いた会社なものですから、一応、私が三代目ということで。でも、私の代で会社はあぶなくなるのではないかと、社員もおやじも本気で心配しています」
「まさか、そんなことはないでしょう」
「ところが、本当なんです」

と、協子がすかさず口をはさむ。
「お坊っちゃん育ち丸出しの世間知らず。ね、郁子、広美ちゃんの転職の一件など、そのいい例よね」
そして協子は賑やかに身振り手振りを添えて、喋り始めた。
――広美は勇介の会社の部下だった。広美が入社して一年たち、その年の新入社員歓迎会はクジ引きによる席決めで、偶然、勇介と隣り合って坐ることになった。あれこれ話してゆくうちに、広美が本来やりたかった職業は、出版や編集の仕事であると打ち明けられた。勇介は、さっそく広美を私の自宅兼仕事場に連れてきた。
広美が退社したとき、勇介は、父親ほどに齢の違う専務にこっぴどく叱責されたという。『本人のたっての希望とはいえ、自分の社の社員を一度も説得も引き止めもせず、みずから張り切って仕事を斡旋してやるなどという取締役部長がどこにいる。まったく三代目は情ないほどに欲がない』
中峰は心底からおかしがっているようだった。
「なるほど、お人柄ですね」
「うちの専務は、あのとき、まさしく烈火の如く怒り狂いまして。私も、自分のしでかした事の思慮分別のなさに、ようやく気づきました。でも、未だに彼女を転職させたことに

ついては、後悔していません」
「そこが一本抜けているのよ」と協子が更にやり込める。
「勇介は、苦労とか失敗から得た教訓が、まるで身につかないタイプなのだから」
「違うぜ、協子。これは人生観の問題で、俺は、やっぱり人間は好きなように生きるべきだと思うんだ。俺はうちの会社の三代目で、おやじ達も、いずれ社長の椅子につかせたいらしいけれど、でも、俺は社長の器じゃない、そう思っている」
「そこが根性なしなの。だから、私にフラれたのよ」
「まあ、まあ。人は年齢に従って変ってゆくものですから。しかし、協子さんにフラれた、というのは事実ですか？　こんなハンサムなのに」
「彼女の言う通りです。学生時代のことですが」
「正直で、気取りのない方だ」
　ひとしきり笑ってから、中峰は、私へと顔を向けた。
「フリーの編集者ということですが、お仲間と一緒に事務所を持ったりしているのですか」
「いいえ。先ほどの広美という若い女性と二人きりです。でも彼女も今年いっぱいぐらいで、来年はもっとやり甲斐のある制作会社にでも紹介しようと」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo